

01-027

重症心身障がい児施設に従事する看護師の看護実践状況と役割認識

小池 伝一

北海道科学大学 保健医療学部 看護学科

【目的】

重症心身障がい児の看護を実践する看護師がどの程度役割を認識し実践しているかを明らかにした。

【方法】

2015年5月～9月まで重心施設看護師に、実践状況と役割認識各々30項目5段階リカードで質問した。また、看護に対する思いは自由記載で質問した。質問紙は郵送法を用い回収した。IBM SPSS 20.0 STATISTICS BASEを用い、対象属性、項目毎実践状況、役割認識は記述統計を算出した。年齢、経験年数、重心経験と実践状況はSpearman相関検定、資格や教育背景と実践状況はMann-WhitneyU検定をおこなった。また、実践の傾向をみるため因子分析をおこなった。自由記載は内容分析をおこなった。

【結果】

質問紙は有効回答140名を分析した。対象の年齢は26～64歳。性別は女性110名。資格は看護師が、教育背景は専門学校卒業が多かった。対象の看護経験年数は4か月～40年、重心経験は2か月～45年。実践30項目の平均は2.67～4.87。平均値が高値の内容は、児の状態を医師に報告と点滴や側管注射管理4.87、低値は児の遊びや勉強の相手が2.67。因子分析の結果は8因子が抽出された。看護の役割と回答した割合が9割以上の項目は、児の状態を医師に報告が97.8%などであった。看護の役割と回答した割合が6割以下の項目は児の交流を図る援助35.1%、児の遊びや勉強相手34.3%であった。実践平均は高いが役割認識が低い項目は、家族の状況に合わせた面会調整が3.51に対し役割認識が62.2%。児と養育者の支援のため、学校教諭やコメディカルなど他職種との調整が3.53に対し役割認識が62.0%。実践平均値は低い役割認識が高い項目は、養育者の相談に乗るが3.56に対し役割認識が75.0%。自由記載の結果は39件で、8カテゴリーに分類された。

【考察】

全項目で小児看護師より実践状況の平均値が低い。また、看護師が実践する援助が5割以下もある。その理由として、他職種と連携し援助を実践していることが推察される。実践状況で平均値が低値の援助は日常生活援助、同胞への関わりや遊びや学習への援助であった。施設では日常生活援助は看護職だけでなく他職種と協働し援助する。または、他職種の役割と看護師が認識しているため実践が低値であると考えた。

01-028

在宅超重症児の父親による父親役割遂行に対する妻の思い

下野 純平^{1,2}、市原 真穂¹¹千葉科学大学 看護学部、²千葉大学大学院 看護学研究科 博士後期課程

【目的】

在宅超重症児の父親による父親役割遂行に対する妻の思いを明らかにし、家族マネジメントの視点から家族への看護援助を考察する。

【方法】

研究対象者は、高度医療機関での急性期治療を終えた後に在宅で生活している超重症児の母親7名であった。研究デザインは質的記述的研究で、半構成的面接法によって収集した内容をデータ化し、コード化、カテゴリー化の後、カテゴリー間の関連性について検討した。本研究は、A大学倫理委員会の承認を得て行い、研究対象者に対しては研究者が対面にて研究の趣旨等を口頭と文書で説明し、書面にて同意を得た。

【結果】

研究対象者の年齢は30歳代が5名、40歳代が2名で、全事例とも父親が家族の経済的役割を担い、全ての母親が専業主婦であった。また、全ての超重症児にきょうだいがいた。超重症児の主な医療的管理は、人工呼吸器が6名、経管栄養が6名、気管切開が5名であった。分析の結果、在宅超重症児の父親による父親役割遂行に対する妻の思いとして9つのカテゴリー、27のサブカテゴリーが抽出された。在宅超重症児の母親は、夫が【父親として超重症児を可愛がってくれていることで得られる母親としての安堵】を感じ、【父親役割を遂行してくれていることへの敬意】を抱いていた。また、夫との【現在の育児家事の協働体制を維持したい】と考えていたが、夫に【超重症児のことを安心して任せきれない】という思いを抱いていた。さらに、自身の【超重症児のニーズに応じた取り組みを尊重してくれていることに感謝】や【話を聞いてくれることで精神的な支えとなってくれていることに感謝】しており、【時にすれ違う歯痒さ】を感じることや【父親役割を遂行する葛藤を汲み取りたい】という思いを抱いていた。そして母親は、夫と【ともに今を一生懸命暮らすしかない】という前向きな思いを抱いていた。

【考察】

本研究の母親は、夫が他の子どもたちと変わりなく父親として超重症児も可愛いがる様子から母親としての安堵を感じており、この思いを基盤として、夫とともに家族としての機能を維持しようと前向きに考えることができたと考えられた。家族への看護援助として、超重症児が高度医療機関に入院中から父親と関わり、父親が超重症児と関わる機会をもてるように調整していくことの必要性が示唆された。

本研究は、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けて実施した研究の一部である。